

内村鑑三のキリスト教道徳論の考察 『羅馬書の研究』の12～13章を中心に

鳴坂 明人

はじめに

内村鑑三(1861年～1930年)が生涯にわたり実験(体験)的に探求したキリスト教信仰の基底である贖罪論、終末論(再臨論)、聖霊論を踏まえて、キリスト教道徳論を内村の『羅馬書の研究』(以降『羅馬』と表記)12章～13章を中心に、その特性と今日的意義を考察したい。

1900(明治33)年以降、『聖書之研究』の発刊による文書伝道活動と聖書研究会の試みは内村自身の信仰の証言であり、近代日本及び世界の情勢に対する痛烈な批判による社会への介入及び社会改良の指針を提示する手段であった。

当初は内村を慕う者の小規模の聖書研究会にすぎなかったが、『聖書之研究』の購読者はその後、全国規模に拡大し、そのピークは再臨運動期(1918年～1919年)におとずれ、中田重治、木村清松等を中心とする神田青年会館における講演会が契機となった。最多のときには1500名ほどの会衆が参会したようである。しかし、その約1年半後に、内村は聖書的根拠を厳密に探求する立場から、再臨信仰に関する熱狂主義的な信仰観に対して疑問を抱き、再臨運動から身を引く。それ以降も、内村の再臨信仰自体は信仰的基軸に据えられたが、自ら主宰する聖書研究と聖書講演会に専心することとなる。内村自身が信仰的に最も円熟に達したことを自称した時期、最も精力を注いだ聖書研究が『ロマ書』の研究である。1921(大正10)年1月～1922(大正11)年10月にわたり、毎日曜日午後大日本私立衛生会館において『ロマ書』研究の講演を内村は60回にわたり行い、毎回600名以上の盛会であったことを内村の弟子の一人、畔上賢造は伝えている。内村の『ロマ書』の研究の講演は畔上賢造が筆記し、畔上の聖書研究も加えて内村が修補し、『聖書之研究』に連載された。その後、単行本として出版されたのが『羅馬』(1924年9月10日発刊)である。

内村鑑三のキリスト教信仰の集大成でもある『羅馬』、その12～13章を中心に、『ロマ書』講演期間(1921〔大正10〕年～1922〔大正11〕年)前後の世界と日本の情勢及び内村自身の個人的生活状況をも踏まえた上で、内村のキリスト教思想を基盤とするキリスト教道徳論の一端を内村独自の聖霊論と社会改良論の観点から論考を試みる。ただし、本稿は主要点を抜粋してまとめたものである。

1 内村鑑三のキリスト教道徳の概観

内村のキリスト教思想はキリスト教道徳論を重要な指標、中枢としている。内村は儒教と仏教を含む幅広い日本の精神に通じる武士道に接ぎ木したキリスト教道徳が個人と国家に多大な影響力を与えることを見据え、生涯にわたり国家や社会に関する諸問題に深く強い関心を失うことはなかった。内村の批判的見地はキリスト教道徳論と諸問題を対峙させ、その本質を適確に捉えようと試みたことである。すなわち、内村はキリスト教道徳を「人の道徳ではなく、神の道の道徳」として、個人的道徳と国家的道徳の公私両面において最高善の実践に通じる崇高な道徳と位置づけたのである。内村の期待した理想の日本と世界は、軍事的経済大国ではなく、キリスト教道徳を基盤とする民主的国家、世界平和である。

2 『ロマ書』12～13章の位置づけ

内村は『ロマ書』を、第一部は「個人の救い」1～8章、第二部は「人類の救い」9章～11章、第三部は「実践道徳」12～16章と、3部に大別し解説する。また、1～11章はキリスト教の福音的教義、12～16章は実践道徳の構成とする。また『ロマ書』の全体構成の前半が福音的教義、後半がキリスト教道徳の配列をパウロ書簡の重要な特性として言及している。

『ロマ書』12章ではキリスト者個人の道徳、13章では社会、国民の道徳及び終末論における道徳、14～16章は道徳実践に関する事項が述べられ、キリスト教道徳は12章～16章において、ほぼ網羅されていると内村は認識している。特に12～13章にキリスト教道徳のほぼ大要が精細に記述されていることを強調する。

3 聖霊の働きとキリスト教道徳

(1) 内村の聖霊理解

内村の聖霊理解は福音主義(プロテスタント)教会の教義を採用し、一神に重点を置き三位を説明する西方教会の伝統を継承している。内村は聖霊なる神を以下のように理解している。

- (一)聖霊即ちキリストの霊は第一に柔和の霊である
(中略)十字架の耻をも敢て忍ぶ霊である、
- (二)聖霊即ちキリストの霊は第二に罪の赦免の霊である、終まで赦す霊である
- (三)聖霊即ちキリストの霊は第三に犠牲の霊である
- (四)聖霊即ちキリストの霊は殊に子たるの霊である、故に之をアバ父よと呼ぶ子たる者の霊と云ふ(羅馬書八章十五節、加拉太書四章六節)

内村の福音理解の基軸である「十字架教」から聖霊の働きによる新たな人間としてのキリスト教道徳論を大胆に展開するものである。内村は『羅馬』において、キリスト教道徳と聖霊の働きとの密接不可分の関係を重視する。聖霊の働きを通して霊的に変革された人間が継続的に聖霊の働きの下にあるならば、そのキリスト者はキリスト教道徳の善行を良心的呵責に苦悩することなく可能であるとする。

聖霊の働きは生来の人間が為す善ではなく、聖霊を宿したキリスト者の善であり、内なるキリストの愛によって奨励される善の実践を内村は説いている。すなわち内村によれば、神に帰属する者のみが積極的に善を為し、神に帰属しない者は罪人であるゆえに、神に反逆し、善を為すことは不可能であるとする。しかし善行に努めて神に帰属する者になるのではなく、神に帰属する者となった結果、その者は聖霊を宿し、積極的に善を為すことを可能とする順序を内村は重視するのである。

(2) 聖霊の働きによる普通道徳不用論への展開

普通道徳の目的は社会における善行の標準を提示し、人の内面的良心に訴えて実行を促すものである。しかし「一般的に云へば人と云ふ者は誰人と雖も道徳の行に由りて神の前に義たることは出来ない」のであり、普通道徳の戒めが高水準である分、その善行の実践には人に強い意志が必要となり、実際には良心の呵責という苦悩を伴い、それは人を罪に定めるのみであり、道徳的人間を養成し、人を救い、社会改良に至らない事実を内村は批判するのである。

内村によれば、『ロマ書』8章2節において、「キリスト・イエスにある生命の御霊の法は汝を罪と

死の法より解放したればなり」を、キリスト者が聖霊を受け、宿すことにより、罪から解放され、律法、道徳からも解放された状態であると了承するのである。キリストの霊、すなわち聖霊が人間の内に介入し働きかけ、人間を霊的に導き聖化し、死に至る罪の根源は駆逐される事実内村は注目するのである。人間の根源的罪からの解放はイエス・キリストの十字架の贖罪を通して、人の罪は赦免されるのである。罪を赦免されたキリスト者は聖霊の介入により、新たな人間に変革され、道徳的善行を可能にすると共に、社会・生活規範である道徳自体の不用に達することを内村は大胆に主張する。無論、誤解される危険を踏まえた上で、内村は7章1～6節の解釈において以下のように述べている。

今こゝに注意すべきは基督者は律法の下に在る者でないこと云ふ一事である、律法が全く廢滅して了ふか又は我等が律法に触れぬほど潔まるか、孰れにしても律法なるものと事実上絶縁してしまふと云ふ事が必要である、一言にして云へば道徳不用である、故に頗る革命的である、従つて之を誤解するときは可成り危険である、併し乍ら誤解を虞れて此大切なる真理を敬遠することは出来ない、人は実に道徳不用の境地に一度到達せずしては眞の信仰の歓しき、貴さを知ることは出来ない、

(3) 聖霊の働きによるキリスト教道徳の完成

内村はパウロの律法に関する深い洞察を革命的であると高く評価し、その結論として、「道徳は決して人を救ひの歡びに至らしむるものではない」と断定するのである。当時の日本における家庭教育、学校教育の「忠孝仁義」を基調する国民道徳は、決して人間の本性を改善し、善の実行に至らせないことを内村は警告するのである。社会・生活規範である道徳は人に自己の罪を自覚させ、神の救いの準備を果たすのみであって、決して人の救済と社会改良に展開しないことを内村は強調するのである。決して人は普通道徳では救われないゆえに、内村は「道徳本位の社会に対する霊的革命的提唱」、すなわち個人が善と正義を積極的に実行するために、聖霊の働きの不可欠であること。霊的に新たに變革されたキリスト者によるキリスト教道徳の重要性を訴えたのである。

特に聖霊の働きに関して、内村によれば、8章1節の「この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし」の解説を聖霊の働きを中心に展開し、キリスト教道徳における神の正義の完全実行の重要性に言及している。神の恩恵と

しての聖霊の働きをもってのみ、人間はその根源的罪から真正に解放され、聖霊を内に宿すキリスト者によってのみ、キリスト教道徳は終末において完成されると、内村は説いている。

4 むすび

内村は『ロマ書』の告げる人間の根源的罪からの解放の実現を目指し、まずキリストの十字架の贖罪と聖霊なる神の働きの不可欠性を説く。聖霊は人間の内に宿り、その者を霊的に導き、普通道徳の存否に関わりなく、正義と善を実行する新たな人間に変革することを開示するのである。

まず個人が神の福音に出会うことを通して霊的に改造され、その者が神の愛と正義を実践することを起点とし、理想的世界と日本国へと改造することを目指すものである。すなわち、健全な社会が健全な人間を養成するのではなく、健全な個人が養成された結果、善を為す健全な社会、国家を構築することが可能となる手法である。聖霊の働きによる徹底した個人の新たな変革を重視する道徳論である。人間中心ではなく、徹底した神中心の信仰に基づくキリスト教道徳論は再臨信仰、神による「万物の完成」の思想を背景とし、聖書が説く真理は国家の存亡以上に人類普遍の最高価値を有するとのキリスト教道徳論である。

今後、内村のキリスト教道徳論と国家主義的国民道徳論を対比し、近代日本に与えた社会的影響力を批判分析し、研究したい。

物語風「坂田祐見聞録」

海老坪 眞

坂田祐（元中村祐）年表略

- 1878（明11）年2月12日 秋田県鹿角郡大湯村で父中村富造、母ミエの次男として誕生。
- 1896（明29）年6月 18歳の時、横浜・横須賀・足尾で働く。足尾で坂田桃吉と邂逅。
- 1898（明31）年8月 陸軍教導団入隊。翌年卒業、軍曹任官、近衛騎兵聯隊所属。
- 1900（明33）年秋 陸軍騎兵学校入学。翌年10月28日卒業、恩賜の銀時計受領。
- 1902（明35）12月8日 陸軍士官学校の馬術教官となる。翌年11月30日現役満期。
- 1903（明36）年5月3日 信仰告白後、バプテスマを受け四谷バプテスト教会員になる。
- 1904（明37）年4月 東京学院高等科入学。6月召集令状受け弘前の騎兵第八連隊入隊。日露戦争

従軍。戦後金鷄勲章功七級と勲七等青色桐葉章受領。

同年4月27日 坂田桃吉の娘チエと結婚、坂田祐となる。

同年9月 第一高等学校入学。1912年7月 東京帝国大学入学。三年後卒業。東京学院就職。

1919（大8）年1月27日 中学関東学院創設。院長就任。

1927（昭2）年4月 財団法人関東学院の時から高等学部部长兼中学部部长就任。

1932（昭7）年10月 副院長就任。1937（昭和12）年4月 再び院長就任。

1940（昭15）年6月24 妻胃癌で召天。翌年8月佐々木トシと再婚。

1949（昭24）年4月 新制大学開設学長就任。1954（昭29）年3月 退任。藍綬褒章受領。

1965（昭40）年3月 院長退任。勲三等旭日中綬章受領。

1966（昭41）年 レッドランド大学より名誉人文学博士号受領。「恩寵の生涯」出版。

1968（昭43）年3月31日 理事長退任。

1969（昭44）年12月16日 老衰により召天（91歳10ヵ月）。12月27日学院葬。

関東学院での坂田祐から抜粹

◆坂田院長が1919（大8）年最初の入学式の訓辞で『人になれ』『奉仕せよ』を掲げて、第一回の卒業式告辞には「諸子に先ず第一に『人になれ』ということ、即ち立派な人格を備えた人になれということであった。これと共に奉仕ということであった。即ち自分以外のもののために尽くすということであった」。

◆米国でリンカーン縁のログキャビン（約二間に三間の一室の丸太小屋）を見た時「私の住んでいた掘立小屋を思い起こした。間口三間に奥行五間の家、天井がなく板を並べて屋根をふき、その上に石を置いて風に飛ばされないようにした」と述懐した。

◆教育勅語発布直後に起った内村鑑三の不敬事件のことで鑑三の語った「然れども茲に儀式に勝る敬礼の存するあり。即勅語の実行是なり」を紹介している。

◆1944（昭19）年3月、大東亜戦争も敗色濃厚な年の卒業式では「諸子の同級生中既に海軍兵学校、陸軍士官学校に入学したる者、海軍甲種子科練習生、陸軍航空兵になった者」を「戦線も銃後も区別のつかなくなった今日、自分の死を覚悟せねばならないと語って死を恐れない為には確乎たる死生

観を持つことで聖書に「我は復活なり生命なり我を信ずる者は死ぬとも生きん。凡そ生きて我を信ずる者は永遠に死なざるべし」また「神われと偕に在ます」は我等に偉大なる力を与える聖句であります」とあります。

◆敗戦後最初に迎えた創立記念日には「学院の創立の精神は基督教の精神即ち福音の根本義による人間教育であります。『人になれ』『奉仕せよ』の校訓をよく体して終生之がために最善の努力をせられることを衷心より希望し」<<従来の教育は国家在って個人のない教育であり、国のためにさえなれば個人はどうなっても構わない教育でした>>学院の教育は聖書の教えに立脚する教育であります>><<その最高のものは聖書の教えに基く人間教育が其中心を為すものである>>と結んでいます。

◆大学生相手の礼拝で「祈祷は宗教の重要な要素である」<<内村鑑三は「基督信徒は絶え間なく祈るべきなり。然りクリスチャンの生命は祈祷なり。彼尚不完全なれば祈るべきなり。彼尚信仰足らざれば祈るべきなり。彼よく祈りあたわざれば祈るべきなり。恵まるゝも祈るべし。呪はるゝも祈るべし。天の高さに上げらるゝも、陰府の低きにさげらるゝも我は祈らん。力なき我、わがかなうことは祈ることのみ」>>と紹介している。

◆これも大学生対象の礼拝で「あなたはどこにいるか。何と答えますか」。私の希望する答えは「主よ私は今 あなたの十字架の下にひれ伏しています」という答えであります。基督教の真髄はキリストの十字架であります。我々の罪を贖って下さる主キリストの十字架であります」と語り祈って終わっています。

◆創立39年記念式辞(1956(昭31)年1月27日)では50年先を見据えた式辞を述べて「今や世は非常な速度を以って宇宙時代に進展しました。宇宙大に発展した科学の進歩は、実に驚くべきものであります。科学は今や一大飛躍を以って宇宙を制覇せんとする有様であります」<<天地万有を造り給うた神は愛であります。神によって造られた人間の行動は、この愛なる神の聖旨に叶うものでなければなりません。科学は如何に発達しても、人類の目的使命に対しては全く盲目であります。アインシュタインが「我々の時代は科学的知識によって得られた進歩について誇る。だが我々の知識をもって、われわれの神たらしめてはならぬ」>><<それ(科学)は奉仕することが出来るが指導することが出来ない>>と語っています。

◆1963(昭38)年の創立記念日式辞では校訓の徹

底を語って「学院は基督教の精神を建学の精神とし、これを具体的に表現して『人になれ』『奉仕せよ』を校訓と定め、創立以来これを強調して来た」<<最後にわが学院の立っているその土台のみ言葉を述べます。「神から賜った恵みによって、わたしは熟練した建築師のように、土台をすえた。そして他の人がその上に家を建てるのである。しかしどういふふうに建てるか、それぞれ気をつけるがよい。なぜなら、既に据えられている土台以外のものを据えることは、誰にもできない。そして、この土台は、イエス・キリストである」>><<幼稚園から大学、大学院まで、このイエス・キリストなる土台の上に建っているのであります>>。そこで「『人になれ』『奉仕せよ』その土台はイエス・キリストなり」が校訓だと言えます。

◆1969(昭44)年、創立50周年記念の日、坂田祐は92歳の老軀にも関わらずグレースセット記念講堂での式典で「私は関東学院創立者として、一言挨拶申し上げます。本日は記念式に、知事、市長ならびに関係方面代表の方々の御臨席、御祝辞を頂きましたことはまことに光栄の至りで御座います」<<あの恐ろしい大震災のため校舎が破壊され、また世界戦争にも、その影響を受けて校舎の大部分が損害を受けましたが、神の御恩寵と関係各位の御援助によりまして、今日の状態に発展したのであります。92歳の私余命いくばくもありませんが、生存中に創立50年を迎えることができましたことは誠に感謝に耐えない次第であります。有難度うございます>>。そして45日後に召天された。

「坂田祐語録」抜粋

- ①従軍して生還は期せられないので、恩賜の銀時計は母に渡して出発した。
- ②部下僅か六名になった。今か今かと敵弾の当たるのを待っていた。『主よ、みもとに近づかん』の讚美歌を音痴のわたしが敵の砲声に和して歌った。
- ③戦闘に参加し戦争は罪悪であることを痛感し、非戦主義者となって帰って来た。
- ④たしの生涯に於いて最も感化を受けたのは、内村鑑三先生とケーベル先生である。
- ⑤一枚の写真を天皇の御真影であるがゆえに、校長は身命を賭して奉護しなければならなかった。生徒はその次であった。
- ⑥すべてが天皇中心であった。一挺の銃も陛下の銃である。誤って銃身に痕をつけても陛下に不忠であると叱られた。
- ⑦わたしの死生観は少年時代は武士道に基づき、

軍隊生活では軍人勅諭により天皇のために死ぬ死生観になり、クリスチャンになって神中心になり、生きるも主のため、死ぬるも主のため即ちキリストのための死生観になった。

- ⑧毅然と聳えた鉄筋コンクリート、日本一等と誇ったそれが、一分間に砕かれてしまった。
- ⑨第一回の入学式に建学の精神として『人になれ』と『奉仕せよ』を述べた。これはわたしが祈って上から示された言葉であった。
- ⑩わたしは教会に幾多の欠点を認め、不満もあしながら、一度受けた教会の恩義を無視して、これを棄てて無教会に行けなかった。
- ⑪玄関と便所を見れば、その家の家風はわかる。
- ⑫TBSのドラマに出た白虎隊長の娘、わたしの母の姿を見た時は、涙が出ましたよ。

義和団の再来？中国の1920年代の反キリスト教運動とキリスト教会

朱 海燕

義和団と1920年代の反キリスト教運動は近代中国が外来宗教（キリスト教）に反対した二つの典型である。以下においてはまず中国におけるキリスト教の歴史の概要を見たのち、1920年代の反キリスト教運動について紹介し、最後に義和団と比較してみたい。

1、中国におけるキリスト教の歴史

中国におけるキリスト教の歴史は635（唐・貞観9）年に伝来したネストリウス派・キリスト教にはじまる。「大秦景教」と呼ばれた同教は200年余り流行るが、845年武宗による「会昌の廃仏」とき仏教とともに弾圧され衰退した。その後、1271年元が建国されると同教（当時はキリスト教諸教派を総じて也里可温教とよんだ）はモンゴル人と共に中国に再来したが、1368年元が減び、同教を信仰していた遊牧民族の人たちがチベット仏教やイスラム教など他宗教に改宗したことによって再び衰え完全に姿を消した。

ローマ・カトリックによる中国伝道は元のときにはじまる。しかし本格的な活動は明末清初のイエズス会の中国伝道からである。宣教政策において中国文化を尊重する適応政策を取り、幾何学など西洋知識でもって士大夫の取り込みに成功したイエズス会の活動が認められて、1653（順治10）年にはカトリックは清朝政府によって「正教」と認定される。しかしまもなく典礼問題をきっかけに伝

道活動は打撃を受けるようになり、1724（雍正2）年には禁教令が出た。このカトリック禁教令はアヘン戦争後の1844（道光24）年にやっと解かれる。

19世紀に入るとプロテスタントによる中国での宣教も始まる。それはカトリックとは違って布教だけでなく、教育や医療、出版などの事業にも力を注ぎ、積極的に近代西洋知識の紹介に努めた。このような文化活動は清朝の自強運動や変法革新に大きな影響を与えた。

一方、カトリックとプロテスタント諸教派による布教活動は1850年代より地方の郷紳や民衆たちによる大小さまざまな仇教事件（教案）を引き起こすことになり、そのピークが多くの外国人が殺害され八カ国連合軍の北京占領を招いた義和団事件（1900年）であった。その後、清が近代立憲君主制の国家建設へと大きく舵を切り、キリスト教を含む西洋的なものに宥格的になったこととその後の中華民国が信教の自由を承認したことによってキリスト教は大きな発展を遂げ、1920年前後、カトリックとプロテスタントの信者数はそれぞれ196万人（1918年）と36万人（1920年）に上った。

2、1920年代の反キリスト教運動とは？

周知のように19世紀に入って中国社会は白蓮教の乱や大變天国など頻発する内乱と列強による度重なる侵略によって大きく動揺し、「天朝上国」から半植民地国に転落した。そこで清は洋務運動など自強運動や戊戌維新、光緒新政など変法運動を行って王朝維持と国家再建を図るものの、道半ばで革命派の主導した辛亥革命（1911年）によって倒れ、それに代わって1912年に中華民国が誕生した。新生した中華民国の最重要課題は国家建設と一連の不平等条約によって喪失した主権を回復することであったが、建国初期から困難を極め、袁世凱の死後（1916年）には、北洋軍閥が統制する北京政府とそれに反対する広東（軍）政府に分裂し、軍閥間の争いが絶えなかった。一方、政治的混迷とは裏腹に思想界では古い文化や思想に反対し全面的な西洋化をめざす新文化運動が展開され、1919年には新たな民族主義の覚醒ともいべき五四運動が起こった。1920年代に入ると中国を取り巻く国際情勢もまた一変し、孫文率いる国民党は、ソ連の「連ソ容共」の政策を受け入れて国民革命（北伐）を推進し、1928年末全国を形式的に統一した。

1920年代の反キリスト教運動はこうした中国近代史の中で起きたもので、五四新文化運動の啓蒙運動の側面や国民革命の救亡運動の側面を合わせ持つ学生運動である。運動そのものは1922年から

1927年まで断続的に6年間行われるが、1910年代の思想的準備期を含めて以下の4つの段階に分けることができる。

(1) 第1段階は1915年から1921年までの思想的準備期である。この時期において運動を思想の面で支えた反宗教思潮が形成された。それは袁世凱の帝制復辟や康有為らの孔教の国教化運動への反対に端を発し、新文化運動における孔教(儒教)批判、少年中国学会の宗教問題に対する討論などを経て次第に形成され、儒教批判からキリスト教を含む宗教一般に対する否定というプロセスを経た。

(2) 第2段階は1922年3月から6月までの「非キリスト教」運動である。そのきっかけは世界キリスト教学生同盟第11回会議の北京の清華学校での開催である。同会議に反対して2月末上海で「非キリスト教学生同盟」が結成された。その母体は上海の中国社会主義青年団で、同盟結成の背後には英米資本主義対コミンテルン・ソビエト連邦という中国を取り巻く外国勢力の対立があった。3月には北京にも「非宗教大同盟」という反対組織がつけられ、共産主義の色が濃く出る「非キリスト教学生同盟」とは違って新文化運動以来の新知識人たちの大連合という性格が強かった。ただ、メンバーのなかには北京大学マルクス主義学説研究会など共産主義グループに属する者も少なからずいた。この二つの組織の呼びかけの下、各地ではキリスト教に反対する非宗教・非キリスト教を名乗る学生組織が多くつくられ、『晨报』(北京)をはじめ各地の紙上では反宗教、反キリスト教の言論で賑わった。

(3) 第3段階は1924年4月から1925年の五・三〇事件前までの教育権の回収を主要内容とする反キリスト教運動である。この段階の運動はミッションスクールの教育権を回収する運動に触発されて再燃したもので、その嚆矢はイギリス聖公会が設立した広州聖三一学校での学生ストライキである。広州が震源地となったのは、当時広東軍政府は厳しい財政的軍事的危機に直面しており、商団事件や関税余剰金問題でイギリスと激しく対立していたからである。運動は「国家主義教育」を主張する国家主義派(1923年末パリで中国青年党を結成している)の影響力が大きかった教育界を中心とする回収(中国政府への登録)の動きと、「文化侵略」論にもとづく国共合作下の国共両党を中心とする反対運動という二つの流れに分かれていた。前者が中国の教育現状に立ち法の整備を通してミッションスクールを中国政府の統制下に置くこととしたのに対し、後者は急進的な立場をとりミッ

ションスクールの破壊や消滅を目標とした。これらの影響を受けて各地では中国政府への登録を求めるミッションスクールの学生たちによるストライキが頻発した。

(4) 第4段階は、1925年の五・三〇事件以後から1927年までの国民革命期における反キリスト教運動である。前段階と同じくミッションスクールの教育権の回収が主な内容となっているが、1920年代の中国民族主義の頂点である五・三〇事件と国民革命(北伐)の反帝国主義の影響を受けて、この時期の反キリスト教運動は反帝国主義運動の一環となっている。運動は全国学生連合会が反キリスト教決議案を通過させて学生の反対運動を促したことによって再開し、北伐軍の進軍先では反キリスト教の宣伝、信徒への殴打、教会堂など教会所有物への占拠や破壊などの反対運動が盛んに行われ、北伐によってキリスト教会側は甚大な損失を被った。1927年3月北伐軍が南京を占領するときには宣教師など外国人が殺害されるという義和団を彷彿させる暴動が起きた。この事件が原因で蒋介石は共産党と袂を分かつことを決意し、反キリスト教運動は蔣によって中止された。

1920年の反キリスト教運動は中国のキリスト教会に大きな影響を与えた。それは時期をほぼ同じくして行われた「自治」・「自養」・「自伝」の実現を目指した中国キリスト教会の「本色化」(土着化)運動を大いに後押しした。多くの中国キリスト者は反対者たちの批判に虚心に耳を傾け反省し、積極的に「本色教会」のあり方について議論しその実現に向けて努めた。幾度の教派間の合同を経て1927年に成立した超教派の「中華基督教会」(会長は誠静怡)はその一例である。また、反キリスト教運動は学校管理における中国人化などミッションスクールの中国化を強く促し、1930年代までにはほとんどのミッションスクールが中国政府への登録を完了し、私立学校として再出発している。

3、義和団の再来?

1920年代の反キリスト教運動は1922年の段階ですでに*North China Daily News* など外紙に「第二の団匪事件の発生」として警戒され、義和団を良いとしない非宗教大同盟は「第2次通電」を発表して義和団のような排外ではないことを強調した。反対組織の名称を「反」ではなく「非」を名乗ったのも義和団のような盲目的な外国反対を意識しての知識人のプライドの表明だろう。

両者の違いについてみるとそれは判然としている。つまり義和団は読み書きのできない農民大衆

の武装組織を主体とし、伝統的な民衆文化に根付いた、国家の擁護・外国宗教の排斥・伝統文化の擁護を目指した、カトリックを主な攻撃対象とする反キリスト教事件だった。これに対して後者は近代西洋思想や国家主義・共産主義などの新思想で武装した新しいタイプの知識人たちによる、国家主権の回復と外国からの文化侵略を排斥することを目標とした、近代国民国家の建設において障害であろうと想定されたキリスト教会とその学校を破壊(統制)しようとする動き(プロテスタントが主な標的となった)といえる。

ではなぜ「第二の義和団」と危惧されたのか。それは両者を支えたのはいずれも反外国主義にもとづく民族主義(ナショナリズム)だったからであろう。しかし、1920年代の反キリスト教運動はけっして義和団の再来ではない。なぜなら近代化に立脚した場合、前者が近代化にむけてのプロセスの一つだったのに対し、後者はそれへの抵抗と反撃だったからである。

「M.E.キダーとE.S.ブース」

岡部 一興

フェリス女学院は、日本で一番古い女学校としてよく知られている。と同時に日本キリスト教史の上でも注目されてきたミッションスクールである。そこで、学校を開いたキダーと学校を育て安定化させたE.S.ブースを対比させる形で叙述したい。

1. 伝道することは神から託された使命

まず問いたいことは、なぜキダーのようなプロテスタントの宣教師が沢山来日したのかということである。アメリカでは独立戦争後、いわゆる西漸運動が展開され、それが終りに近づくと海外に目を転じ、1898年米西戦争に勝利、フィリピン、グアム、プエルトリコを獲得、さらにこの年ハワイを併合した。1845年12月ニューヨーク『モーニング・ニュース』紙において、編集長のジョン・L・オ・サリヴァンが「テキサス併合論」において、年々人口が100万人増えていくなかで、神によって与えられた大陸をわれわれが拡大するのは「明白な運命」であるとし、神の摂理がそこにあるというアピールをした。またオハイオ州シンシナシティの会衆派の牧師であったジョサイア・ストロングは『わが祖国』(1885年)を出版、ベストセラーになった。その本のなかで、非キリスト教国の国民に伝道することは神から託された使命であるとし、アメリ

カの政治的膨張とキリスト教の伝道が結び付けられて海外伝道が熱を帯びていった。

ちなみに当時のアメリカの人口を見ると、1800年から南北戦争前夜までの人口の動きは500万人から3000万人に増加している。この人口増加は西部開拓を促進、アメリカはキリスト教を喪失するのではないかという危機感があったが、逆に自分たちのアイデンティティを教会に求め、それ以後キリスト教が広まっていった。

アメリカは19世紀前半農業国として拡大し、南北戦争後は広大な空間を工業用地として利用し、19世紀末には世界一の工業国になっていった。1869年5月には大陸横断鉄道が開通し、サンフランシスコから日本へのルートが開けたこともあって、ここから横浜に続々と日本に宣教師がやって来た。1859年から73年2月までに来日したプロテスタントの宣教師は60名。60名中27名が女性であった。1882(明治15)年までに来日したプロテスタント在日宣教師大会の報告では、男子127人に対し女性は186人、女性が男性宣教師を圧倒しその大半がアメリカの宣教師であった。

このような流れの中でフェリスの創立者キダーがやって来た。そこで今日までフェリスを支えてきた人物は沢山いる。キダーから始まって、ブース、カイパー、オルトマンズ、シェーファー、ステゲマン、そして初代日本人校長都留仙次と沢山の先生を挙げることができる。キダー、ブースという形で引き継がれて安定した学校運営がなされる。しかし、関東大震災でカイパー校長が亡くなり校舎は全壊、フェリスは立ち直れるかと思われたが、見事に立ち直った。フェリスを生み出した母はキダー、フェリスを育てたのはブースであったと語られてきた。

2. キリストの福音を知らない人々のために役立ちたい

メアリ・エディ・キダー(Mary Eddy Kidder)は、1834年1月31日バーモンド州ウィングダム群ウォーズボロで父ジョン・エディ・キダーとキャサリン・ターナーの間に生まれた。7人兄弟の4番目、先祖は17世紀イギリス南部からニューイングランドに移住したピューリタンであった。メアリは野鳥や動物が好きで、勉強熱心な活発な女性で小学校を出た後、1850年に通称タウンシェンド・アカデミー(リーランド・セミナリー)に1年ほど在学、その間に回心し北ワーズボロの会衆派教会の会員になる。その後サックストン・リヴァー・アカデミーに在籍、1855年マンソン・アカデミーで学ぶのである。

ブラウンは来日する前、1851年4月から59年3月にかけてニューヨーク州オーバンの近くにあるオアスコ・アウトレットのサンド・ビーチ教会の牧師をし、同時にスプリングサイド・ボーディング・スクールをこの地に建てた。

筆者は2014年夏、オーバンでS.R.ブラウンがどのような働きをしていたかを調査するために出かけた。オアスコ・アウトレットの改革派教会(Owasco Reformed Church)のE. J. dewaard 牧師を通じて、同教会員のミセス・ローレルさん(Laurel Auchampaugh)の協力を得て調査をした。またユニオン神学校のパーク・ライブラリーでも調べた。オーバン神学校に留学した日本人留学生は73名で、そのうち明治学院神学部出身者は40名に上った。現在サンド・ビーチ教会の建物は残っているが礼拝は行われていない。それから少し離れた所に、その教会を引き継いだ形で改革派の教会(Owasco Reformed Church)がある。キダーは、1856年頃ブラウンの経営するスプリングサイドの学校に赴任した。スプリングサイドは男子校でキダーは少年たちを教え、ブラウンの信頼を得たのである。

この時、オーバン神学校の学生でサンド・ビーチ教会に所属していたのがフルベッキで、ブラウンの助手的存在として日曜学校をはじめとする教会のこまごまとした雑務をこなしていた。またのちにフルベッキの妻となったマニオンもいた。さらにブラウン、フルベッキと一緒に自費で来日した独身女性のエイドリアンズもこの教会に所属していた。S.R.ブラウンの書簡によると、ミス・キダーは15年以上も親しい付き合いをし、オーバンのスプリングサイドにあるブラウンが経営する学校で数年間男子生徒の教師として雇われ、「少年指導には、まれにみる天分の持ち主」で、才能に恵まれ、人好きもよく、手腕もあり、人間を洞察する力を持っているとブラウンは言う。

1867年4月、ブラウンは山手の住宅を全焼、貸していた和訳聖書の一部の原稿を除いて全て失ったので翌5月帰国した。その後、69年6月ブラウンの娘の夫、英国領事のラウダーから書簡が届いた。日本政府はブラウンに1ヶ月250ドルを支給し、政府の学校の校長に就任して欲しいとの公文書であった。新潟英学校の英語教師として着任するに際し、1869年、ブラウンは女子教育と伝道の機会を待っていたキダーを同行させて新潟英学校に赴任することになった。

キダーが日本に来た第一の動機は、「キリストの

福音を知らない人々のために役立ちたい」、キリストの福音を伝えたい、教育という仕事を通してキリストの愛を伝えたい、それは、神の特別な摂理に導かれたものだという信仰だった。S.R.ブラウンとキダーは、1869年8月27日に横浜に到着、そして同年10月24日新潟に行き3年の契約で、ブラウンは英学校をはじめることになる。一方キダーは、世間体を保つということから新潟滞在中は、日本の方式にならって、ブラウン夫妻の娘という扱いはなった。キダーは少人数ながら少女たちのクラスを始めている。しかし、70年6月、ブラウンは突然解雇。その原因は自宅で聖書を講義したことが役人の反感を買い、辞任を余儀なくされたということである。ところが解雇が決まって間もなく、ブラウンのところへ横浜修文館の教師として招聘したいとの知らせを受け、横浜に赴くことになり、同年7月16日キダーと来日。キダーはヘボン夫人クララの塾の4人の生徒を引き継ぐことになり、住居を山手211番に定め、ヘボンの39番で9月21日から授業を開始、これがフェリス女学院の始まりである。

1873年7月10日、キダーはミラー(Edward Rothersey Miller)と結婚、ミラーはプリンストン神学校研究科を修了、米国長老教会海外伝道局から任命されて72年6月に来日した29歳の若い宣教師だった。彼らは急接近して結婚、教派が違うことから難しい問題が起こった。通常、教派の異なる宣教師同士が結婚した場合、男性宣教師の所属するミッションに夫人が転籍し、男性宣教師は妻帯宣教師としての俸給を受け取ることになが、キダーはこの考え方を認めなかった。

キダーはそのまま改革派教会で働き、夫は来日したばかりで基盤がないので、むしろミラーの方が改革派に変わった方がよいという判断があったと思われる。ミラーは長老派ミッションから咎められないように、既婚宣教師の給料の半額を受取ることを申出た。ところが74年2月の手紙ではミラーの俸給1000ドルから、ミラー夫人がリフォームド派伝道協会から受け取る700ドルを差引いた金額、300ドルを決定してきたのである。迷惑をかけまいとした思いは打ち砕かれ、侮辱以外の何物でもないものとなった。その後長老派ミッションから俸給を受け取らず、自給宣教師としてキダーの仕事を手伝う形をとり、74年10月には長老派伝道局に離籍届を出すに至った。

一方、セミナリーはどうなったかという、1872年2月では13名に増え同年9月にはヘボンの39番

で行っていた授業を野毛山に移した。それは大江卓県令の計らいで、県官舎の一部を借りて授業を行なうことになる。懸案だった校地問題は、なかなか解決のメドがつかなかった。山手178番の土地は、プラインがミッション・ホーム（現横浜共立学園）を設立するために、71年8月に貸し渡しの申請をしたが、アメリカ政府が海兵隊の病院の建設地として指定していたので獲得できなかった。ところがキダーが72年に申請したものが、74年11月2日大久保利通内務卿より貸渡証書案の認可が下りることになる（1115坪を100坪につき12ドルで借用）。かくして75年40名収容の寄宿舎も建ち、6月1日フェリス・セミナーとして出発、「フェリス」の名は校舎建築に財政的援助を惜しまなかったりホームド・ミッション総主事アイザック・フェリスとジョン・M・フェリス父子の名を記念してつけられた。ミラー夫妻は79年11月休暇で帰米、81年4月日本に来ますがフェリスを辞し、伝道に専念することになる。その引き際は実に見事であった。

【参考文献】

Strong, Josiah “Our Country” The Belknap Press of Harvard University Press 1963

A・E・マクグラス著、佐柳文男訳『プロテスタント思想史—16世紀から21世紀まで』教文館、2009年

G.F.フルベッキ『日本基督教会歴史資料集』(8)日本プロテスタント伝道史—明治初期諸教派の歩み』

小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師』、東京大学出版局1992年

鈴木美南子『フェリス女学院110年史』

拙稿「オーバン神学校に学んだ人々」『明治学院大学キリスト教研究所紀要 第47号』2015年参照。

高谷道男『S・R・ブラウン書簡集』

榎本義子訳『キダー公式書簡集—ゆるぎない信仰を女子教に』フェリス女学院 ・榎本義子訳『キダー公式書簡集』

山本秀煌『フェリス和英女学校六十年史』

(次号へ続く)

植村正久の生い立ちをめぐる

—評伝叙述の充実のために— (1)

中島 一仁

はじめに

植村正久は言わずと知れた、日本プロテスタン

ト草創期の最も代表的な指導者の一人である。その生い立ちに、なぜ拘泥するのか。植村が大身の旗本家の出身であることや、横浜に流れ着いて苦学したことが、植村の思想形成に影響を与えたとしている研究が多く見られるからである。

植村はかつては十分な評伝のなかったことでも知られていたが、1970年ごろ以降、叙述の試みがなされ、近年もその流れは続いている。ところが、先行研究には植村の生い立ちに関して誤伝が平然と引用されていたり、事柄の解釈に疑問を感じざるを得なかったりするものが少なからずある。生い立ちに限ったものではあるが、彼の伝記的な事実を解明し、思想形成に与えた影響を検討し直してみるの意味は小さくないと考える。

先行研究の問題点

先行研究が、植村正久の父・禱十郎、母てい及び本人についてどのように表現しているのかを比較してみたい（青芳1935、雨宮2007、大内2002、京極1966、佐波1937、田代1970から抽出）。

父は、「家禄千五百石の旗本」「大家の殿様」「植村家の第十代目」と記され、ほとんどが大身旗本の当主だとしている。すなわち「お殿様」のイメージである。母はその妻なのであるから「奥方様」ということになる。

植村正久本人とは言えば、「徳川旗本千五百石取りの総領」などと書かれ、その家の跡継ぎ（長男）、つまりは徳川の世が続いていれば、父のような「殿様」になっていたはずだ、とされている。

植村という1500石の旗本家は確かにあった。『寛政譜以降旗本家百科事典』1によると、寛政期（19世紀初め）の当主は政之助正房といった。だが、同書のその後の当主名に禱十郎は見いだせないし、ほかの武鑑類や旗本の任職記録、江戸切り絵図、村ごとの領主一覧などにもやはりその存在を発見することはできないのである。

次に植村家の領地に関してである。例えば「植村家は家禄に離れ、旧領地なる上総なる山辺に帰農し、豚飼ひなどを為したれど家計振はず」[青芳1935: 16]などとされており、植村家は上総国山辺郡に領地を持ち、明治維新後はそこで帰農したという。ところが、領地の所在地を上総国山武郡としているものもあり、一定していない。

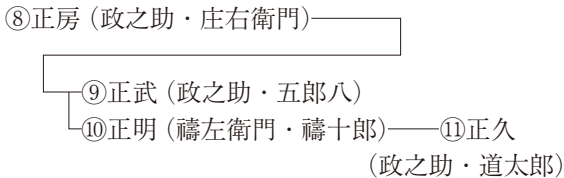
また、諸書には、植村家は零落の後に養豚を営んだと記されている。文献を探ると、確かに開港後、滞日外国人の需要を受け千葉県内などで養豚が始まっているが、多くの初期投資を要したし技術的にも難しく、元旗本一家が始められるようなもの

だったとは考えられないのである。

生まれから横浜修学期まで

(1) 父

植村の家系に関して佐波は、植村のもとに伝わった家系図と先祖書を載せ〔佐波1937：646-655〕、次のような継承関係を示している。



寛政期の当主正房の跡を正武が継ぎ、正明、正久と継いだというのだが、既に述べたように正明（禰十郎）が当主になった形跡はない。

一方で佐波は次のようなことも書いている。「九代目である五郎八正武には嗣子が無かつたので、弟の禰十郎が養嗣子となつたのであるが、先代の病気が重ると同時に、ここに植村啓次郎、遠山左衛門尉景元二男なる者が、『続者には無之候得共（一字不明）養子奉願……』とて、我こそは養嗣子であり、第十代目であると名乗り出てゐる事実がある」〔佐波1937：652〕。啓次郎とは何者なのか。

『寛政譜以降旗本家百科事典』1の植村家の項には、正房より後の当主として啓次郎と梅之助（庄右衛門）の2人が挙げられている。

啓次郎は確かに当主であった。佐波が書いていた「遠山左衛門尉景元」とは、遠山の金さんで有名な江戸町奉行遠山金四郎のこと。その2男啓次郎が植村家の当主であったということは、養子に入ったということにはほかならない。

同事典によると、梅之助の養祖父は啓次郎、養父は庄右衛門といい、実家は牧野という家であったとのことなので、啓次郎一庄右衛門一梅之助と植村家は継承されたわけだ。

実はこのあたりのことまでは、雨宮は探り当てている。芝露月町（現・新橋5丁目）に隣接する植村家の屋敷の隣に遠山家の屋敷もあり、植村家の敷地の一部を遠山家に貸していたことにも触れられている。

そして雨宮はまた、正武の後、家督は禰十郎に譲られず、隣家の遠山家から養子の啓次郎を当主に迎えたのではないかと推測している。理由に関しては、植村家の経済的な事情で持参金目的から養子をとったのかもしれないとしている〔雨宮2007：37-44〕。

遠山家の家臣がつけていた日記を翻刻した岡崎によると、景元には4男があり、長男景鳳は植村五

郎八の養子となっている（『遠山金四郎家日記』解題:11-12）。五郎八とは正武のことであろう。

『遠山金四郎家日記』に初めて啓次郎が登場するのは、嘉永元年1月2日条の「植村啓次郎様御出」との記載である。家督相続していたかどうかは分からぬが、この時点までに養子に入っていたことは判明する。同書の解題によると、啓次郎は後に庄右衛門と名乗っている。安政2年9月28日条に「一、植村庄右衛門様久々御病氣之処、今夕刻御内実御死去被成候事」とあり、亡くなったことが分かる。

さらに安政3年8月30日条に「一、昨廿九日申下刻、植村庄右衛門様御病死」とあり、植村家では2年続けて庄右衛門という名の当主が死去している。これは『寛政譜以降旗本家百科事典1』に記されていた梅之助の養祖父、養父についての記述と符合する。

日記の元治4年2月10日条には「植村梅之助様」の名が登場する。

明治維新後の梅之助とその一家はどうなったのであろうか。徳川家の静岡移転に従った旗本らを記した「駿河表召連候家来姓名」（国立公文書館蔵）には「陸軍用取扱」の所属に「植村梅之助」の名が載っている。「駿府江移住相願候者家族人数書」（同）には「植村庄右衛門／同五人」とあり、一家6人で移住している。佐波は植村家が新政府に仕え、朝臣（ちょうしん）になったとしている〔佐波1937：665〕が、誤りである。

以上から、禰十郎の境遇は次のようであったと推測されよう。禰十郎は植村家の正統な継承候補者であったが、恐らくは家計窮乏などが理由で、持参金に期待して同家は遠山家から養子を迎えた。この養子・啓次郎が亡くなった後も元来の植村家の出身者に当主が戻されることはなく、再び養子が家督を継いだ。明治維新で当主一家は静岡に移ったが、この中に禰十郎とその妻子は含まれていなかったのであろう。

植村家での禰十郎は当時で言う「厄介」であった。『日本国語大辞典』には「江戸時代、一家の当主の傍系親でその扶助を受ける者、生家に寄食して相続者に養われる次男、三男など」とある。

それがどのような境遇であったのかを想像するに参考になる例が、1300石の旗本三嶋家である。

同家の第12代当主であった政堅は若いころに不祥事がもとで出世の望みを失っており、有望な後継者を欲していた。当時の同家には後継候補の男子として第10代当主（故人）の孫2人がおり、屋敷内に厄介として暮らしていた。ところが、政堅は他

家から養子政養を迎え相続させた。このとき政養の実家は、厄介の住む長屋の建築費用100両を含む400両を持参金として払った。厄介の2人が住む長屋は、本所石原にあった屋敷(540坪)の敷地内にあり、1人は6畳と5畳半、もう1人は6畳と3畳の部屋を持っていた〔三嶋・西脇1987:362-365,388,391-392〕。

植村家もこのような家族関係であったのであろう。遠山家など他家から恐らくは持参金付きの養子が入り、禰十郎が本来の親族は逆に厄介として屋敷内に狭い部屋をあてがわれて暮らしていたのではないかと推測される。(以下、次号)

【文献一覽】

- 『静岡県史 通史編』5 (近現代1) (1996)
『千葉県の歴史 通史編』近世2 (2008)
青芳勝久『植村正久伝』(教文館出版部、1935)
雨宮栄一『若き植村正久』(新教出版社、2007)
大内三郎『植村正久：生涯と思想』(日本キリスト教団出版局、2002)
大口勇次郎「農村女性の江戸城大奥奉公：生麦村関口千恵の場合」『女性のいる近世』(勁草書房、1995)
京極純一『植村正久：その人と思想(新教新書)』(新教出版社、1966)
斎藤多喜夫「横浜新風土記稿9・谷頭種の豚と鎌倉ハム」『横浜開港資料館館報 開港のひろば』29 (1990)
佐波亘編『植村正久と其の時代』1 (教文館、1937)
田代和久「植村正久における『キリスト教』と『武士道』：初代プロテスタント『福音』理解の一典型」『日本思想史研究』4 (1970)
中島覚『神奈川県食肉屠畜場史』(栗田奏二編、日本食肉史基礎資料集216輯)(栗田、1986年)
畑尚子『徳川政権下の大奥と奥女中』(岩波書店、2009)
増田淑美「吉野みちの生涯：その手紙を通して」『江戸時代の女性たち』(吉川弘文館、1990)
三嶋超監修、西脇編著『旗本三嶋政養日記：幕末・維新时期を生きる旗本みずからの記録』(徳川氏旗本藤月三嶋氏四百年史叢書1)(徳川氏旗本藤月三嶋氏四百年史刊行会、1987) (次号へ続く)

【研究発表リスト(その41)】

- 第386回 2016.12.17 堀田 国元
「留学クリスチャン第一号女医岡見京の一生」
第387回 2017.1.21

- 『「武相の女性民権とキリスト教」の成果と課題』
江刺 昭子
「フェリス和英女学校で学んだ一女性、——田中
参とその「日記より」 金子 幸子
第388回 2017.2.18 民谷 雅美
「横浜クライスト・チャーチ史1860—2016」
第389回 2017.3.18 久米 三千雄
「禁教下の和訳聖書ヨハネ傳」
第390回 2017.4.15 播本 秀史
「新井奥邃の人間観」
第391回 2017.5.20 宮城 幹夫
「沖繩キリスト者の社会正義と和解の神学—
米国統治下の社会・政治的文脈を踏まえて
(1945—1972)—」
第392回 2017.6.17 牧 律
『「山室家の女性たち」民子・富士・阿部光子』
第393回 2017.7.15 西田 直樹
「近代看護とキリスト教」
第394回 2017.9.9 阿部 志郎
講演「福祉のこころ」講演後お茶会
第395回 2017.10.21 中島 一仁
「彦根藩士・鈴木貫一とキリスト教」
第396回 2017.11.18 海老坪 眞
「コペルの生涯」
第397回 2017.12.16 小田部 進一
講演「ルターと95か条の論題」講演後お茶会
第398回 2018.1.20 大濱 徹也
講演「日本プロテスタント史研究の現状と課題」
第399回 2018.2.17 赤井 励
「嶋崎赤太郎の留学時代—三浦新七との往復書
簡を中心に—」
第400回 2018.3.17 山内 晴子
「朝河貫一 —イェール大学教授の「民主主義」
と歴史学：天皇制民主主義の学問的起源—」
第401回 2018.4.21 竹内 智子
『「キリシタン時代の遺産と音楽—生月島『ダン
ジク様講』参加の報告会を含めて』
第402回 2018.5.17 出版記念会
『横浜の女性宣教師たち— 開港から戦後復興
の足跡』 岡部一興発表のあとお茶会

オーバン神学校と明治学院神学部

なぜ、オーバン神学校なのかということ、かつて明治学院神学部を卒業した牧師が海外へ留学すると、決まってこの神学校に留学していたのである。現在、明治学院大学には神学部はない。

1877(明治10)年アメリカ・オランダ改革派教会とアメリカ長老派教会が合同し、日本基督一致教会生まれ、東京一致神学校が誕生した。その後この神学校は明治学院神学部になって行ったが、1930(昭和5)年植村正久なきあと東京神学社と明治学院神学部が合併し、日本神学校になり、現在の東京神学大学へと発展していったのである。

オーバン神学校は、1939年にその使命を終えて、神学校は閉じたが、講演会や研修会を行なう組織としては残っている。かつて、オーバン神学校はN.Y.州のオーバン市にあった。N.Y.のラガーディアン空港から飛行機で北に1時間の所にシラキュース空港がある。そこから西へ30マイルほど行った所にオワスコ湖があり、そのオーバンという小さな都市にオーバン神学校があった。オーバン神学校は、1810年1月オーバンにあった第一長老教会牧師のD.C.ラッシングの呼びかけにより、長老派と会衆派の結びつきによって設立された。1万5千坪ほどのキャンパスには、学生寮モルガンホール、図書館、教室、校長宅、教授宅、食堂、クラブハウスなどがあった。

しかし、現在はウイラード・メモリアル・チャペルとそれに隣接するウェルチ記念館の建物だけが残っている。校内には世界的な宝飾品で有名なティファニーによって設計された素晴らしい教会堂がそのまま残っていて、在りし日の姿を彷彿させるものがある。この教会堂の持ち主が必要なものを分けて売りさばこうとした時、住民から反対運動が起って寄付を集めこの会堂が残った。現在は結婚式にも使われ土産品などを扱い、見学者が結構来る。ここで資料を探索、またユニオン神学校のパーク・ライブラリーにも資料があるので、そこにも行って来た。

この神学校に初めて留学したのは、田村直臣で、卒業が1885年でこれが一番早く、その神学校の最後の卒業者の一人が、横浜指路教会の主任牧師になって若くして亡くなった菅生三雄牧師であったことが分かった。『G・Wノックス書簡集』によると、1882年のはじめ田村が牧会する教会員の既婚婦人との間に良からぬ噂が立ち、長老会で問題となった。田村は身の潔白を主張した。しかし、二度、三度彼女といたことは、日本人にとって不道徳であると、長老会が彼を譴責したのであった。その後、M.T.トゥルーのとりなしにより、推薦状を貰ってオーバン神学校に留学した。またフルベッキとの関係もあって、その後オーバン神学校との関係が深まって行ったのである。

実に田村牧師から菅生牧師まで73名がオーバン神学校を卒業していた。そのうち明治学院神学部の出身者が40名にも上っているのには驚いた。日本基督教団が成立する以前、日本基督教会に所属する牧師たちが海外で研鑽を積む時には、決まってこの神学校に留学したので、日本基督教会系の明治学院神学部出身者が多かったのである。勿論、東北学院、同志社、青山学院などの神学部の出身者もいたが、明治学院神学部の出身者が圧倒的に多かった。

オーバン神学校とブラウンが牧したオランダ改革派の教会を見てみると、1856年にフルベッキがこの神学校に入学、59年に卒業している。フルベッキは、神学校時代にブラウンが牧するオランダ改革派のサンド・ビーチ教会で助手的な働きをし、ブラウンの推薦で、59年に同じ船で来航し、ブラウンは神奈川へ、フルベッキは長崎に上陸した。

ブラウンは来日前の1851年から59年の8年間サンド・ビーチ教会に任せ、スプリングサイドという学校を立ち上げた。その先生だったのが、メアリ・キダーであった(この学校は現在スプリングサイド・インというホテルになっている)。サンド・ビーチ教会は日本のキリスト教と大変関係深いことが今回の調査で分かった。この建物は礼拝としては使用していないが、結婚式や集会で使用している。

なお、オーバン神学校のことは、明治学院大学キリスト教研究所『紀要』47号、「オーバン神学校に学んだ人々」に書いているので参考にして欲しい。筆者は2014年に調査をしたが、効果をあげるためにオワスコ・アウトレットのリフォームド教会の牧師に問い合わせをした。運よく、30年来オーバンにおいてキリスト教史を専門にしている同会員のローレルさんを紹介して下さいました。そのローレルさんが同行して下さいましたので、調査が非常にスムーズに行ったので大助かりであった。

(岡部一興)

【会員の著書出版紹介】出版おめでとうございます。

- ・小檜山ルイ『帝国の福音 ルーシー・ピーボディとアメリカの海外伝道』東京大学出版会 2019年1月 8,800円
- ・田中喜芳『シャーロック・ホームズ トリビアの舞踏会』シンコーミュージック・エンタテイメント、1,500円+税
- ・江刺昭子+かながわ女性史研究会編『時代を拓いた女たち かながわの112人』神奈川新聞社 2019年7月1,400円